

## 年間第 18 主日 (ルカ 12:13-21)

神のために豊かになる生き方の報い



「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」(12・20) イエスのたとえ話の結びを説明するために、今日の説教はあるわけですが、一人の司祭が伝えることのできる量は限られています。各自、自分にとってイエスのこの招きがどのように当てはまるのかを考えるなら、私たちは神の前に豊かになれると思います。

一週間、田平教会は公開ミサを中止しました。中田神父は次の日曜日、一週間ぶりにミサに参加できてよかったなと思えるようなミサと説教はどういうものだろうかと考えて過ごしました。そんな中、ミサが中止になってすぐ、長崎教区の司祭たちにとって誰もが恩人と言える人が亡くなりました。長崎でカトリックの葬儀社を立ち上げ、その会長を務めておられたパウロ西村勇夫さんです。皆さんの中にも新聞でお読みになった方がおられるかもしれません。

ほどなくして通夜と葬儀の日程が決まりました。24日(日)の夜7時に通夜、25日(月)午前11時から葬儀ミサでした。しかし長崎市内の新型コロナ感染状況を考えると、出席すべきか迷うところでした。考えた末に、弔電を打って、田平教会で同じ時間にミサをすることにしました。もちろん非公開のミサでしたが、心は浦上教会のミサに参加しているつもりでおささげしました。

弔電は、私が浦上教会助任時代にお世話になったことを思い出しながら、思いつくままに打ちました。「パウロ西村勇夫様のご訃報に接し、心から哀悼の意を表します。多くのカトリック信徒の天国への旅立ちをお手伝いしてくださり、感謝申し上げます。『これらの人々にしてくれたことは、わたしにしてくれたのである』とのイエスのことばを受け取る時が来ました。田平教会からミサの中で心を込めてお祈り申し上げます。カトリック田平教会中田輝次」

もっと、文面に込めるべき事柄があったかもしれませんが、関係各位の弔電が殺到しているでしょうし、どうせ読まれることもなかろうという安易な考えで、思った通りのことを申し上げたわけです。ところが私の弔電は、報告によると三番目に読み上げられたそうです。ビックリしました。

西村さんに届けたかった思いはこうです。彼は、カトリックの葬儀会社の代表として、教会葬儀のたびに、一切を横に置いて奉仕してくださいました。いつ何時葬儀の依頼が舞い込むかもしれず、常に緊張を強いられたはずです。まさに、「神のために豊かになる生き方」を仕事に選んだわけです。

ですので、その報いはマタイ福音書 25 章「すべての民族を裁く」にあるように、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(25・40)これがふさわしいのではないかなと思ったのです。

「神のために豊かになる生き方」は、選ぼうと思えばだれでも選べる生き方だと思います。私は聖ヤコブのお祝いにと公式のミサのないこの機会に、早い時間から釣りに出かけた日がありました。まぐれで3キロ弱の鯛を釣り、刺身と兜煮を用意して届けました。仕掛けに食いついた瞬間に、豊神父様の顔が頭に浮かんだのです。私のことは二の次でした。これだけでも、「神のために豊かになる生き方」です。ちょっと考えればすぐ思いつくことから、生涯にわたっての生き方まで、いろいろ選べると思います。

ミサを中止した一週間、もしかしたら「自分のために富を積む生き方」だったかもしれません。それでも、もう一度ミサが再開してみたら、「神のために豊かになる生き方のほうが優れているなあ」と感じたのではないのでしょうか。皆さんにとって取り組めそうな「神のために豊かになる生き方」を見つけて、その道を究めることができますように。

年間第 19 主日(ルカ 12:32-48)